獅子・孔雀

三島由紀夫

獅子(しし)・孔雀(くじゃく)

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草50 S

昭和四十六年二月二十七日 発行
昭和四十七年十二月二十五日 二刷

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本所
© Yôko Hiraoka 1971　Printed in Japan

新潮文庫

獅子・孔雀

三島由紀夫著

目次

軽王子と衣通姫……七
殉教……五五
獅子……七三
毒薬の社会的効用について……一三三
急停車……一四七
スタア……一七七
三熊野詣……二三九
孔雀……二九九
仲間……三三三

解説　高橋睦郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

獅子・孔雀

軽王子（かるのみこ）と衣通姫（そとおりひめ）

第一部

崩りましし雄朝津間稚子宿禰天皇の皇后が下部どもに松明をかかげさせ、夜の深みを先皇の陵へと急ぐ時に、あやしい火が陵のあたりでかき消えたのを見た。

ゆくてに陵の輪廓はおぼろげに、夜の鳥群が星空から舞い下りまた飛び翔つのが遠望され、陵をめぐる森のたたずまいは仄かであった。暗い蛇体と見える森の一端にかききえた火のさまは、あたかも蛇が眠りのひまに舌を閃めかしたようであった。

侍臣たちはおめき交わした。

その火は悪しき神々のものでなければ、奥津城を荒らす盗賊のものである。野山をはせめぐる悪しき神の息吹は火であり、熊白檮の森がかつてそのために時ならぬ月の出のように燃えた。もしまた山賊ならば、その者らは先皇のおん亡骸をかざる宝玉のたぐいを狙うのであろう。

気高き皇后は微笑みつつ侍臣を制した。

「恐れたもうな、至高き先皇の臣たち。……おおみ魂にあい奉らんとて、わたくし共は殊更深き夜の刻をえらび、小暗き森かげをたどって来ました。わたくし共をみちびきたもうのは他ならぬ雄朝津間稚子宿禰天皇のおおみ魂です。世にましし時は津々浦々の国民にとりこの世の幸とおん慈しみの源、神去りますや津々浦々の国民にとりこの世の歎きと追懐の源、かのおおみ魂はわた

くし共の今ゆく夜の野・夜の山々をしろしめし、星に重る夜穹のかぎりをしろしめし、擁護を垂れたもうことに何の疑いがありましょうか。恐れたもうな。

それよりも松明のかがやきに土の下なる先皇の御眼をよろこばせ、ありし世のおん慰みの一つをでもよみがえらすことができるように」

畏って侍臣はもっと松明を勢いよく燃え立たせいと下部どもに命じた。己れらは剣を抜き、皇后を警護しつつ進んだ。

陵は野のさなかから生れたばかりの新たな小山のようであった。鮮やかな土の色が近づくにつれてあたりの鬱たる夜景のなかに際立った。月は皇后が仮宮を出る時すでに沈んだのであった。隈なく星の敷きつめられた天にところまだらに箔のような雲がわなないていた。しかし地上には風がなかった。地上には虫の音があった。秋の稔りのあとの安息に打沈み、産後の婦のように心みちたりて蒼ざめ、みわたすかぎり静寧な微光を放っている大地それ自らが鳴りひびくかと思われたのだ。

やがて皇后の一行は陵の前に至った。松明がそこかしこに据えられ、その明るさに鳥もおそれて近附こうとしなかった。

「畏れながら大御后さま」と老いて膝まで届く白髯を垂らした一人の侍臣が言った。

「おおみ魂が白鳥の下り立つごとくわれらのまえに下り居させたもう時、森にひそみ居りし山だちの群が躍り出で、み魂をさわがせまいらすことがありましょうなら、豊葦原中国はみ怒りのために安き日なく、人は泯び野山は枯れ果てようもしれませぬ。あやしき火の主をたしかめまし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た後、御拝あそばされるのが順序ではございますまいか」
「智恵深きものよ。おん身の諫めにわたくしは従いましょう」と皇后が答えた。
その時兵士の幾人かがかしましく声をあげ皇后も侍臣も思わずそこへ眼差を聚めたのだ。
見知らぬ下部が兵士たちに取押えられつつ皇后を仰いで何かわからない言葉で叫んでいた。
兵士の長が膝まずいて奏した。
「森から忍び出で大御后さまに近づきまいらしょうとした者を捕えました」
「わたくしはその者の奏し言を聞こう」
「ああ、何事を仰せられまする」老いた侍臣は激しく頭を振った。
取押えられていた見知らぬ下部の舌が、ようやく激情から覚め、ききとれる言葉で叫びはじめた。
「衣通姫様が……衣通姫様に……身は仕えまつる下部……」
皇后の釧は愕きのためにおののいた。
「衣通姫とか……」皇后の呟きは口辺にゆらめく悩みと悲しみの微笑のなかに消えた。内なる悩みも女神の裔である女人の矜りを曇らすには足りなかったに相違ない。かえってその額は新宮の白木のように神々しく、その唇には夜明けの光のような微笑が漾った。――松明ははつはつと音立てて、周囲の闇へ火の粉を撒きちらした。
目ざとい侍臣が見た。森を背に白い裳の人が立っているのを。
その姿は今までは誰の目にも見えなかった。捕われた者の上に人々の眼差は据えられていた。

白き人かげは幻としか思われなかった。

「松明を」

「松明を」

皇后はその方を見ず、禱るような様子で亡き君の陵をみつめるばかりであった。

松明の一群が近寄るのを見ても白き人は身動きもしなかった。それはなよやかに威ある姿であった。その背後に神を負うており、近寄る者がひざまずくことを予知しているかのようであった。

祭壇のようにその人の周囲を松明の半円がとりまき、森の黒ずんだ緑がつややかに照らし出され、おどろいて塒をとび立った鳩の羽音がしばらくあたりの闇を領した。

美しき人の面影はゆらめく焔の火影に、たとえば生絹にえがかれた絵姿が風にゆらぐかのごとく立ち現われた。豊葦原中国にこれにまさる美顔はなかった。高く結い上げた豊かな黒髪は夜が丹精をこらしてその最も精妙な部分を磨き上げ姫の頭上に贈ったもののように、神殿の奥、殊更神の身近にただようつややかな闇の化現であった。その下にはえもいわれぬ、新月のように澄んだ額があった。しずかな若草の眉があった。そしてもえさかる松明を映して煌めくならびなき双の瞳が見られた。わけてもその姿に霊が宿るかと思われた美しさは、白い裳が松明の影と光にかかわりなく、内からの光輝で曙いろに照り映えたさまである。その身の艶色が衣を通して晃るのであった。

皇后の妹姫、先皇の思われ人、衣通姫は言葉寡なに命じた。

「姉君のお傍へ……」

侍臣たちははじめて夢心地から覚め、深く礼をし姫を皇后の御前に案内した。

――かねてより天皇は衣通姫に御心をかけておられた。姫の艶色を伝える声は世に高かった。母君と共に姫が在るのは近江の坂田であったから、鹹ならぬ海の女体の神ではないかと噂された。さすがに天皇は妹姫について皇后に問わせたもうことは稀であった。しかし御生国の湖のけしきを語るようにと屢々仰せられた。皇后が語る湖のけしき、対岸の山は夕日に映え湖一帯に落日のきらびやかな投網が投げられる時も、澱んだ隈々は木立の影に守られて素速く暮れかけ水の面に水草のあさみどりが暮れ残るさま、また月の出に雁の一トつらが湖の空をわたるありさま、それらは天皇の御心に諳んじられて、まだ見ぬ面影をいつも目のあたりに見るのと異ならなかった。

天皇の使者が坂田を訪れたとき、衣通姫は行末に花咲き凋み枯れ落ちるものを一瞬の裡に見たのであった。姫は優諚を辞みえぬわが心に不吉な魅わしの翳が襲うのを知った。それに身をまかせ、たちまち藤原宮の人となった。天皇の幸しは繁くあった。皇后は甚く苦しまれた。姉君をはなれて心の安らぎを得たいという姫ののぞみにより、河内の茅渟に新宮が築かれた。又しても日根野の遊猟にことよせた御幸が度重なった。

母なる皇后の苦しみを、皇太子軽王子は不審な面持でと見こう見する他はなかったのだ。愛より先に愛の苦しみを識るとは何事であろう。まだ見ぬ一人の美しい人が母大后も贈りえぬ歓びを父に贈り父天皇も与ええぬ苦しみを母に与えるとは何事であろう。かつて王子は狩競のほかにたのしみを思わぬ少年であった。朝霧の野の眠りをおどろかされた鹿の群がかろやかにのがれ去り、

露けき蜘蛛の巣があたりに乱れて虚しいのを見ると、王子の心には悔いと共に故しれぬ苛立たしさが疼いた。獲物はいつも王子の手からのがれようとしていた。捕われたのちでさえも。――血にそみ狩手の前にうなだれて動かなくなった時は、それは「死」で狩手に抗い死を楯として永久に狩手からのがれて行こうとしていた。

あの夕狩の折に、禁を犯して藤原宮にしのび、軽王子は父天皇の思われ人をはじめて見た。不用意にもその人は供も従えず、月にあかるい萩の小径をもとおっていた。朱いろの櫛にかざられた豊かな髪をようやく支えている白い項や憂わしげな眉引がほのかに見えた。声をかけることはおろか姿を見せることさえ王子にはできず、月かげが弓の所在を示さぬようにそれをしかと身に抱いて大松の幹にかくれていた。やがて美しい人は暗い殿居のなかへ歩み去った。――それは衣通姫にとっても罪のはじめであった。あらわな庭に身をさらしてはならないという御誡めを、明日茅渟に移る名残惜しさに破ったのであるから。ましてそれは王子にとっては罪のはじまりであった。

あくる日の夕刻、姫はすでに藤原宮を去ったと人が告げた。王子は狩を忘れ昼も夜もただ一度垣間見た面影のためにくるしみ悶えた。恋しい人を目離れせず打眺めていたときが罪であれば、それがいかばかりはげしく無垢な喜悦であったかが思い返された。罪とは人が味わってはならぬ神の喜悦をおかしたことへの神の御怒りとしか思われなくなった。――王子はまた母后を遠いところに在すごとく感じた。母后がひねもす苦しんでいられるものは何であろうか。王子には母が多きをねがいすぎていられるように思われた。王子が狂おしく恋について希うのは刹那を希うに

すぎないのを、母后は常住の愛をねがわれて止まないのだ。しかし軽王子は刹那も常住もそれが希われるかぎり同じ長さの時に他ならないことを知らなかったのだ。

王子をゆりうごかした愛は、合しせんと念う愛であった。鹿が狩手の矢もおそれずに牝鹿が姿をかくした谷間へと荊棘をふみしだいて駈せ下りる愛であり、つがいの鳩を死ぬまで森の小暗い塒にむすびつける愛であった。その愛の前に死のおそれはなく、その愛の叶わぬときは手も下さずに死ぬことができた。王子もまた、死が驟雨のようにふりそそいでくるのを待つばかりである。どのみち徒らにわたしは死ぬ、と王子は考えた。死をおそれぬものが何故罪をおそれるのか？

ある夜竟に軽王子は河内の茅渟宮なる衣通姫のもとへ忍んだ。

衣通姫は罪の畏れと羞らいにおののきながら、この不敵な若きものの面差を見た。それはまざまざと天皇の面影を伝えていた。しかも天日のごとく若くかがやかしく、悩みと憂いが兆しかけた眉は凛々しさを加え、豊葦原中国にまた見ること叶わぬような美しい壮夫であった。

撫子や壺すみれの咲きみだれる山腹をつらぬいて頂きの山田へかよう下樋の水のように、王子の妻問いは人にはそれと知られなかった。ただ天皇御一方はそれに気附きつつ黙っていられたように思われる。ある朝茅渟からかえり天皇の御前に出たとき、王子は天皇の御眼に恕す色がうかぶのを仰いで心打たれた。――その愛のために何人も苦しまずに済むような愛へと、御自らの愛が承け継がれてゆくのを希われたのであろうか。それとも王子に伝わる天皇御自らの分身もまた天皇が愛したもうたものを愛しその愛を未来の幾世へと伝えてゆくのを悦ばれたからであろうか。それとも大后と同じ苦しみを通して大后への愛がよみがえったのであろうか。ともあれ凡ては近

づきつつあった死が天皇の愛を無辺の彼方にまで漂わせ、それをたとえば千万の蜻蛉に化え、蜻蛉がいかなる庭いかなる野にも飛び交うように、この世のあらゆる愛にまで自在に与りうる霊的な力に化えたのであろう。

天皇は崩御あらせられた。

衣通姫の歎きは限りもなかった。

衣通姫の来し方も行末もただ愛がひしめいていた。来し方には死せる愛、行末には生ける愛が。姫には一つの美しい言葉しかなかった。軽王子への新たな愛と故天皇へのつきぬ歎きとは一つのものであった。

皇后のように追懐の裡に引籠り死者の愛と哀しみと歓びとを爾後のわが愛わが哀歓として生きようとは姫はしなかった。姫はかえるべき邦、帆を休めるべき湊を持たなかった。

皇太子軽王子は父天皇神上りますや、茅渟宮を離れること稀になった。よろずの祭事は弟宮穴穂王子にゆだねられた。群臣も国人も軽太子に背いて弟宮に帰った。

茅渟の里人でさえ二方の御用を承わるものが少くなった。しかし恋を妨げうるほどの何があったであろう。――天皇の崩御は早春のことであった。河内の野には若草が萌えはじめた。

今年の燕が檐端にうたう頃から、茅渟宮では毎日が野遊びであった。菫や茅花は地に咲き満ち、二人のすぐ傍らを野兎がおそれげもなく走りすぎることがあったが、それはこれほど身動きもせぬ人を美しい樹と思いちがえたのに相違なかった。かげろうや隈ない日の光や馬酔木の花をゆるがすほどのそよ風や、ものうげな春の大気に労れて、とある杉村の奥に見出だした泉に口をつけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com